

ウィズコロナ時代の帰省の行方

— 「オンライン帰省」の可能性を探る —

主任研究員 北村 安樹子

当研究所では、全国に先行する形で発令された7都府県への緊急事態宣言の直前に「第1回新型コロナウイルスによる生活と意識の変化に関する調査」（2020年4月3日・4日）を実施した*¹。今回の第2回調査は、その後対象地域が全国に拡大されるなかで迎えたゴールデンウィーク明けの5月中旬、政府が39県での解除を決める直前（2020年5月15日・16日）に行ったものである*²。全国の20～69歳の男女1,000名を対象として行ったこれらの調査ではいずれも、新型コロナウイルスの感染拡大にともなう回答者の生活や意識の変化についてたずねている。

本稿では第2回調査の結果から、全国的な緊急事態宣言下で迎えたゴールデンウィークにおける帰省の予定やその中止状況に関する調査結果に注目し、今後迎えるウィズコロナ時代における帰省の行方について考えてみたい。

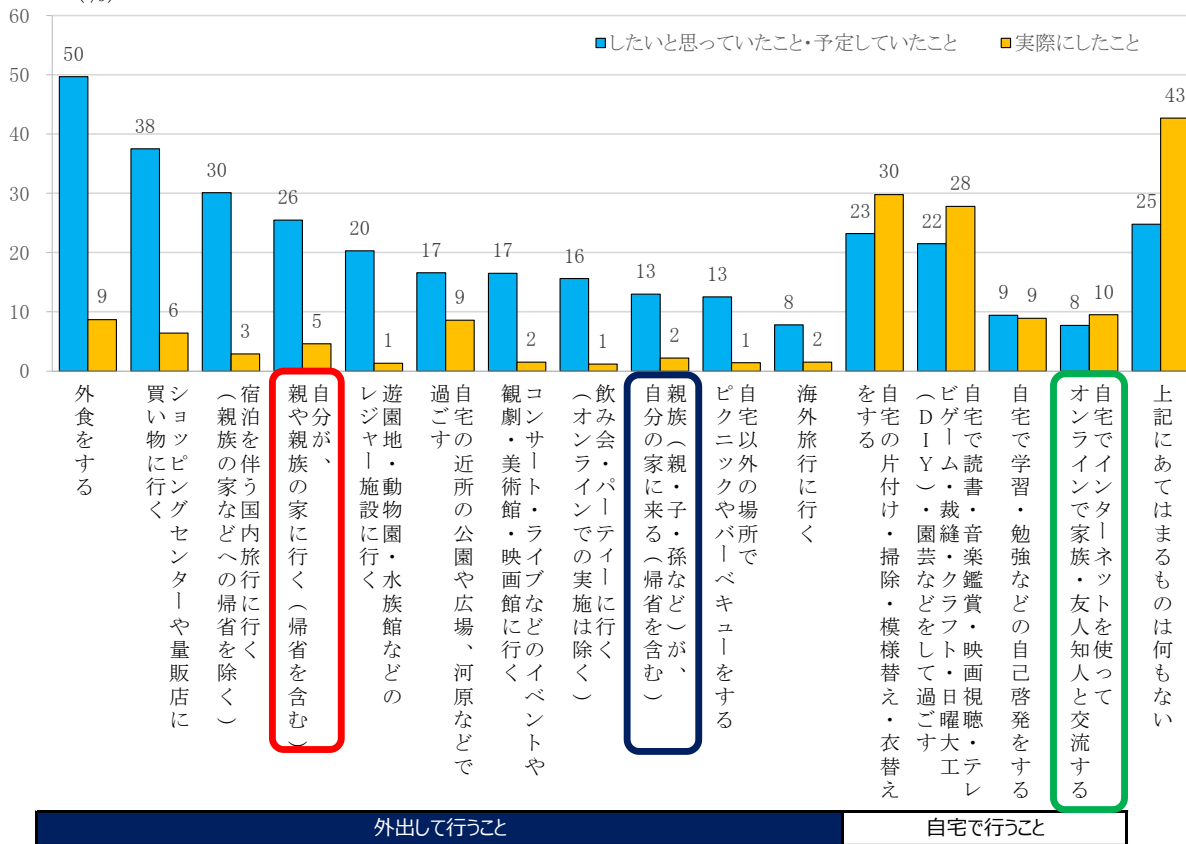
<ゴールデンウィークの予定で最も多かったのは「外食」「買い物」「国内旅行」>

第2回調査では主にゴールデンウィークにおける消費機会の喪失についてたずねる目的から①ゴールデンウィークにどのようなことをしたいと思っていたか、またはすでに予定していたか、②実際に何をしたか、のそれぞれに関し図表1にある計16の選択肢をあげて複数回答形式で回答を求めている*³。なお、これらの選択肢は、外出して行うことと、自宅で行うことから構成されている。

調査の結果、①したいと思っていたこと、予定していたこととして回答者全体で最も多くあげられたのは「外食をする」であり、「ショッピングセンターや量販店に買い物に行く」「宿泊を伴う国内旅行に行く（親族の家などへの帰省を除く）」がこれに続いた（図表1）。「上記にあてはまるものは何もない」と答えた人は25%にとどまったことから、回答者全体の8割弱は、外食や買い物、旅行をはじめ、連休中に何らかのしたいことがあった、ないしは具体的な予定をたてていたことがわかる。

一方、②実際に何をしたかについての回答では、「上記にあてはまるものは何もない」とともに、「自宅の片付け・掃除・模様替え・衣替えをする」「自宅で読書・音楽鑑賞・映画視聴・テレビゲーム・裁縫・クラフト・日曜大工（DIY）・園芸などをして過ごす」が続いた。選択肢にあげた項目のなかでは、自宅の片付けをしたり、自宅で趣味等を楽しんだ人が比較的多かったことがうかがえる。

図表1 ゴールデンウィークにしたいと思っていたこと・予定していたこと、実際にしたこと<複数回答> (%)



注 : 調査対象は、全国の20~69歳の男女1,000名。調査方法は、インターネット調査。
 資料 : 第一生命経済研究所「第2回新型コロナウイルスによる生活と意識の変化に関する調査」2020年5月実施。

<「自分の帰省」予定があった人は3割弱、「親族の帰省」予定があった人は1割強>

この設問には、ゴールデンウィーク中の帰省予定やその実施状況に関する選択肢とともに、「自宅でインターネットを使ってオンラインで家族・友人知人と交流する」といういわゆる「オンライン帰省」を含む可能性がある選択肢が含まれる。以下ではこれらへの回答状況から、まず帰省の予定や実施状況について分析する。

ゴールデンウィーク中に予定していたこと、実施したかったこととして「自分が、親や親族の家に行く (以下「自分の帰省」)」および「親族 (親・子・孫など) が、自分の家に来る (以下「親族の帰省」)」をあげた人の割合は、前者が26%、後者が13%であった。

なお、「自分の帰省」および「親族の帰省」を予定していた人と、実際にはそれらを行わなかった人の差は前者が21ポイント、後者が11ポイントとなっている。前者は外食 (41ポイント)、「ショッピングセンターや量販店に買い物に行く」 (32ポイント)、「宿泊を伴う国内旅行に行く」 (27ポイント) に次ぐ大きさとなっている。また、今回のゴールデンウィークの期間中に、実際に自分が帰省した人は回答者全体のわずか

5%、親族が帰省した人は2%に過ぎなかったが、これらを予定していた人はそれぞれその5～6倍以上いたことがうかがえる結果となっている。

<30代女性の4割弱、60代女性の3割弱が予定していたが、実施者はいずれも1割未満>

次に、性別や年代、外出の自粛状況による帰省予定や実施状況の違いについてみる。

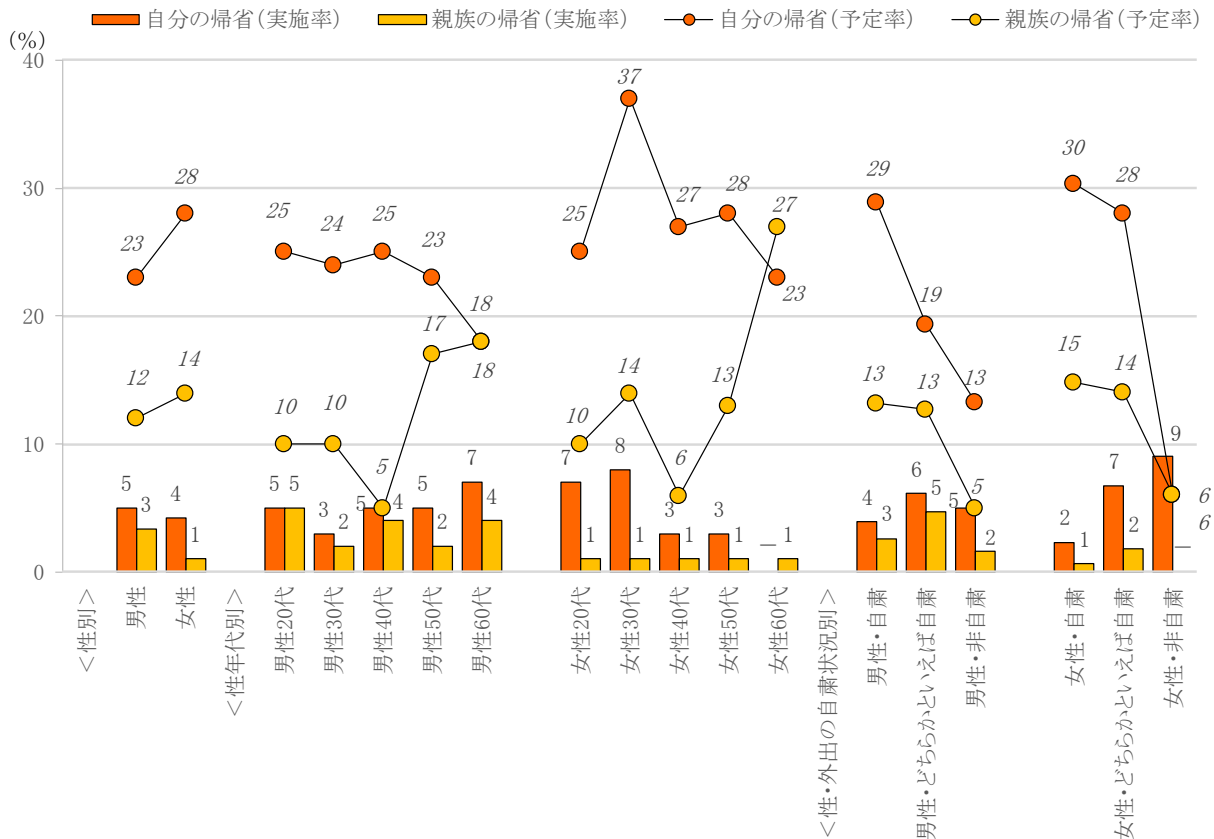
図表2は、①したいと思っていたこと、予定していたことについての設問で「自分の帰省」および「親族の帰省」をあげた人の割合（予定率、折れ線グラフ）と、②実際に実施したこととしてそれらをあげた人の割合（実施率、棒グラフ）を、それぞれ性別、性・年代別、性・外出の自粛状況別に示したものである。

これをみると、前者の割合が最も高かったのは30代女性の37%で、同年代の男性や他の年代の女性を10ポイント前後上回っている。これに対して、後者の割合が最も高かったのは60代女性の27%であり、男性や他の年代の女性を10ポイント前後上回っている。「自分の帰省」を予定していた人は30代女性で、「親族の帰省」を予定していた人はその親世代にあたる60代女性で、他のグループに比べ多かったことがわかる。

また、自分が帰省したり、帰省する親族等を迎えた人の割合は、性別や年代、外出の自粛状況によらず1割を下回っている。予定率と実施率の差が最も大きいのは「自分の帰省」に関しては30代女性（29ポイント）、「親族の帰省」に関しては60代女性（26ポイント）である。換言すれば、緊急事態宣言下という状況でなければ、今回のゴールデンウィークには30代女性とその母親世代にあたる60代女性において、帰省を行ったり、帰省する親族を迎える人が多かったと考えられる。

なお、「自分の帰省」や「親族の帰省」を予定していた人が、その予定を中止したり、中止になった割合（以下「中止率」）は9割前後に達した一方、予定外に自分が帰省した人や、親族が帰省した人もわずかにみられた*4。全国的な緊急事態宣言下で迎えた今回の大型連休では、行く側、迎える側とも、帰省を予定していた人の多くが外出や対面接触を自粛し、予定を中止したなかで、該当者は少ないものの、何らかのやむを得ない理由等のために、予定外に帰省したり、親族の帰省を迎えた人もいたと考えられる。また、夏休みや年末年始などの帰省シーズンに比べ、ゴールデンウィークに帰省を予定する人や実際に帰省する人（予定したり、実施できる人）はもともと少ないと考えられるが、予定率と実施率の差を鑑みると、緊急事態宣言下にあった今回の連休では特に、自分が帰省したり、帰省する親族等を迎えた人が少なかったと考えられる。

図表2 ゴールデンウィークにしたいと思っていたこと・予定していたこと、実際にしたこととして「自分の帰省」「親族の帰省」をあげた割合<複数回答>(性別、性・年代別、性・外出の自粛状況別)



注：図表1に同じ。「自分の帰省」は、「自分が、親や親族の家に行く(帰省を含む)」、「親族の帰省」は「親族(親子・孫など)が、自分の家に来る(帰省を含む)」。
資料：図表1に同じ。

<自宅で家族・友人知人との「オンライン交流」を行ったのは主に20代男女>

最後に、「自宅でインターネットを使ってオンラインで家族・友人知人と交流する」(以下「オンライン交流」)を選択した人の割合についてみる。

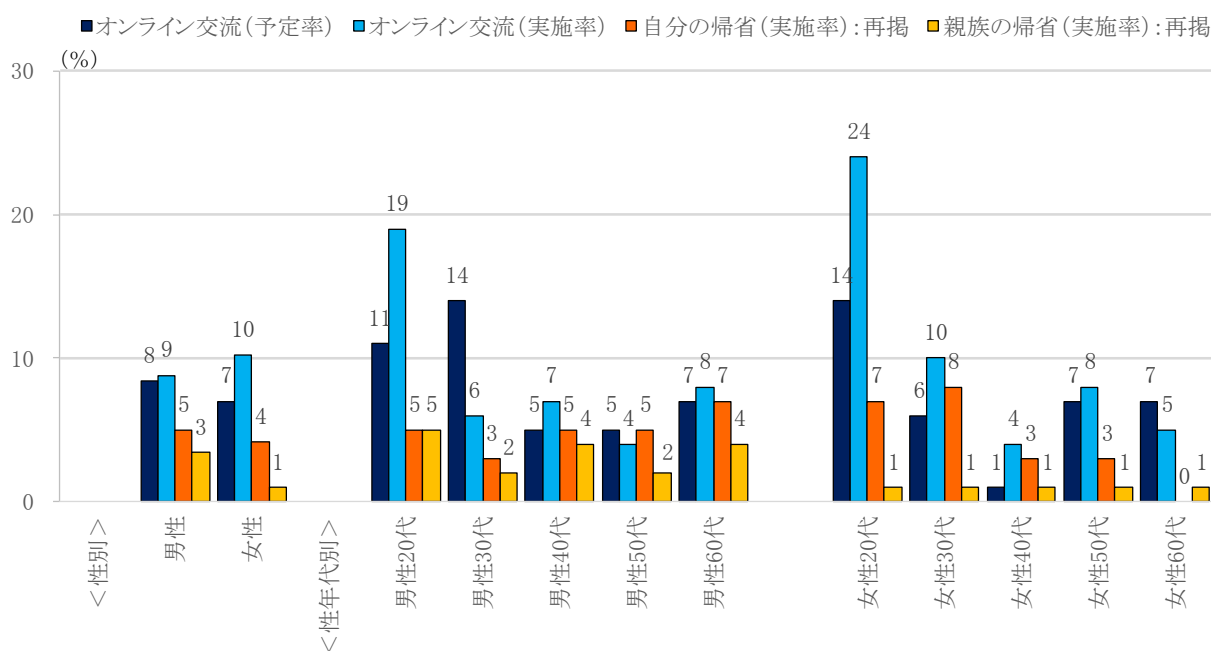
冒頭の図表1でみたように、ゴールデンウィークにこのような交流を予定していた人は回答者の8%を占めた一方、実際に行った人は10%となっている。これらの結果は、「オンライン交流」を予定していた人の存在とともに、予定外に実施した人の存在を示唆している*⁵。

図表3は、これらの回答割合を性別・性年代別に示したものである。まず、予定率をみると、男性では20代と30代、女性では20代において他のグループに比べやや高く1割強を占める。一方、実施率をみると、男女とも20代で最も高く、20代女性では4人に1人を占めて全グループのなかで最も高くなっている。

ただし、これらの「オンライン交流」には、帰省先の親族や友人知人以外の人との交流が含まれる可能性がある。このため、これらの「オンライン交流」をいわゆる「オ

「オンライン帰省」の指標としてみることに限界はあるが、調査結果をみる限り、いわゆる「オンライン帰省」を行った可能性がある人は20代の男女、特に女性で高いと推測される。

図表3 ゴールデンウィークにしたいと思っていたこと・予定していたこと、実際にしたこととして「オンライン交流」をあげた割合＜複数回答＞（性別、性・年代別）



注：図表1に同じ。「オンライン交流」は、「自宅でインターネットを使ってオンラインで家族・友人知人と交流する」。「自分の帰省（実施率）」「親族の帰省（実施率）」は再掲値。

資料：図表1に同じ。

＜「オンライン帰省」は広がるのか＞

緊急事態宣言の解除にともない、今後は外出や移動、対面接触機会に関する段階的な条件緩和が想定されることになるが、帰省という慣習を含めて、しばらくは生活のさまざまな場面で手探りの状況が続くと考えられる。緊急事態宣言下で迎えた今回の大型連休には、感染のリスクを防ぐ「オンライン帰省」の長所や、オフラインコミュニケーションの代替性が強調されてきたが、調査結果は今回の大型連休に「オンライン帰省」を行った可能性のある人は20代男女という限定的な範囲であったことを示唆していた。

本格的な帰省シーズンでもある夏を前に、コロナ問題の終息への見通しには依然不透明な要素が残る。今後は帰省という慣習や家族との交流においても、安全な「リアル帰省」のための環境整備とともに、オフライン・オンラインの長所を柔軟に取り入れた新たなコミュニケーションスタイルを模索する動きが広がる可能性もあると思われる。

(ライフデザイン研究部 きたむら あきこ)

【注釈】

- *1 調査の方法や結果の概要は、当研究所発行の以下のニュースリリースを参照されたい。
 - 「新型コロナウイルスによる生活と意識の変化に関する調査（前編）」
http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/pdf/ldi/2020/news2004_01.pdf
 - 「新型コロナウイルスによる生活と意識の変化に関する調査（後編）」
http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/pdf/ldi/2020/news2004_02.pdf
- *2 調査の方法や結果の概要は、当研究所発行の以下のニュースリリースを参照されたい。
 - 「第2回 新型コロナウイルスによる生活と意識の変化に関する調査（働き方編）」
http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/pdf/ldi/2020/news2005_02.pdf
 - 「第2回 新型コロナウイルスによる生活と意識の変化に関する調査（消費編）」
http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/pdf/ldi/2020/news2005_03.pdf
 - 「第2回 新型コロナウイルスによる生活と意識の変化に関する調査（健康編）」
http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/pdf/ldi/2020/news2005_04.pdf
 - 「第2回 新型コロナウイルスによる生活と意識の変化に関する調査（つながり編）」
http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/pdf/ldi/2020/news2005_05.pdf
- *3 この結果については*2の消費編（p.5）で紹介している。
- *4 「したかったこと・予定していたこと」として「自分の帰省」「親族の帰省」をあげ、それらを実際に行った人は29人（11%）、12人（9%）であった一方、それらを予定していなかった人で行った人は17人（2%）、10人（1%）であった。
- *5 「したかったこと・予定していたこと」として「オンライン交流」をあげ、実際に行った人は41人（53%）であったのに対し、予定していなかった人で行った人は54人（6%）であった。

*弊社ホームページの「新型コロナウイルス意識調査特集ページ」にてこれまでに実施した調査データや関連レポートを公開しています。

http://group.dai-ichi-life.co.jp/cgi-bin/dlri/ldi/total.cgi?key1=v_year